三重県桑名市

篠原遺跡発掘調査報告書

―篠原農住土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査―

２００２.３

桑名市教育委員会

例　言

1　本書は三重県桑名市大字桑部字篠原に所在する篠原遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査及び整理作業は篠原農住土地区画整理事業に伴う事前調査として、平成 10 年～ 13 年度にかけて実施した。

3　調査体制は以下のとおりである。　（所属は発掘調査参加当時）

調査主体　　桑名市教育委員会
調査担当　　水谷芳春（桑名市教育委員会）
調査補助　　日紫喜勝重（別府大学学生）、山田倫子、大杉規之（以上愛知学院大学学生）
調査参加者　大村至広、竹内弘光、岩間裕治、後田将志、水野義隆、額賀紀伯、（以上愛知学院大学学生）　柴田涼子、石原和子、石原豊丸、竹尾雪子、中久木薫、中久木久道、松岡式子、松岡房子、松岡まさ子、松岡みね子、松岡好照、

4　本書の執筆、編集は水谷芳春（桑名市教育委員会）、大杉規之（現桑名市市内遺跡発掘調査員）、植田弥生（株式会社パレオ・ラボ）が行った。執筆分担は目次に記した。執筆、編集にあたっては斉藤理（桑名市教育委員会）の協力を得た。

5　発掘後の地形測量は株式会社イビソク、出土木材の樹種同定は株式会社パレオ・ラボにそれぞれ委託した。

6　発掘調査及び本書の作成過程において、下記の機関、方々にご指導、ご協力いただいた。記して感謝の意を表す次第である。
石神教親（多度町教育委員会）、尾野善裕（京都国立博物館）、嘉見俊宏（三好町教育委員会）

7　現地調査に関しては、地元の方々に格別の援助をいただいた。厚く御礼申し上げる。

8　本調査は、桑名市篠原東農住組合、桑名市農業協同組合、桑名市都市整備部都市計画課の文化財に対する深いご理解のもと実施することができた。調査に対する格別のこ協力、ご援助に対して厚く御礼申し上げる。

9　調査に関する諸記録、及び出土遺物は桑名市教育委員会で保管している。

目　次

本文目次

例言
第１章　遺跡の位置と周辺環境 ……（大杉）P. 1
第２章　調査に至る経緯と経過 …… P. 2
　第１節　調査に至る経緯 ……（水谷）
　第２節　試掘調査 ……（水谷）
　第３節　調査経過 ……（水谷）
第３章　調査の成果 …… P. 4
　第１節　遺構 ……（大杉）
　第２節　遺物 ……（大杉）
　第３節　出土木材の樹種同定 ……（植田）
第４章　まとめ ……（大杉）P. 10

挿図目次

挿図１　試掘・調査地点位置図 …… P. 3

表目次

表１　出土木材樹種同定結果 …… P. 8
表２　ピット計測表 …… P. 12
表３　遺物観察表（１）…… P. 13
表４　遺物観察表（２）…… P. 14

図版目次

図版１　遺跡位置図 …… P. 15
図版２　周辺地形図 …… P. 16
図版３　遺構平面図 …… P. 17
図版４　基本層序・遺構断面図（１）…… P. 19
図版５　遺構断面図（２）…… P. 20
図版６　遺構断面図（３）…… P. 21
図版７　遺物実測図（１）…… P. 22
図版８　遺物実測図（２）…… P. 23
図版９　写真図版　遺構（１）…… P. 24
図版 10　写真図版　遺構（２）…… P. 25
図版 11　写真図版　遺構（３）…… P. 26
図版 12　写真図版　遺物（１）…… P. 27
図版 13　写真図版　遺物（２）…… P. 28
図版 14　写真図版　遺物（３）…… P. 29
図版 15　写真図版　出土木材の樹種…… P. 30

第１章　遺跡の位置と周辺環境

篠原遺跡は三重県桑名市大字桑部字篠原に所在する。

本遺跡のある桑名市は三重県の北東部に位置しており、北は桑名郡多度町、西は員弁郡員弁町、南は四日市市・三重県朝日町に隣接する。市の東部から南部にかけて揖斐川・長良川の両河川と伊勢湾最奥部という水域に囲まれ、北部には養老山脈より続く丘陵部が伸びている。また市の南部には西から南東へと流れる員弁川があり、その両岸には標高 40 ～ 70 m弱の丘陵地が形成されている。市域には河川の影響により、丘陵部からごく緩やかな傾斜を持ちつつ広がりをみせる沖積平野が発達している。このように自然環境の中、本遺跡は員弁川右岸の緩やかに傾斜した沖積平野上に立地している。

員弁川流域には弥生時代以降の遺跡が多数確認されており、主に古代・中世の寺院跡・城館址・集落跡などが点在している。員弁川北岸には七和廃寺・額田廃寺・西方廃寺といった奈良・平安時代の古代寺院が並び、その周辺には須恵器や灰釉陶器、瓦類などを焼成した七和１・２号窯跡、西方古窯跡・東方古窯跡などの窯跡も確認できる。[1)]

南岸には西金井遺跡・蔵元遺跡・古屋敷遺跡といった弥生時代から中近世にまで至る複合遺跡が流域一帯に見られる。このうち西金井遺跡は平成４年度に発掘調査がされており、幅２～３m、南北約 140 mのトレンチを遺跡範囲内に入れる形で調査が行われた。調査面積が約 400 ㎡と狭く、また員弁川の氾濫原に所在することもあり、ほとんどの遺跡は確認されていない。しかし、包含層からは弥生時代中期後半から鎌倉時代にかけての遺物が多量に出土している。[2)]

西金井遺跡のある沖積平野の南側、丘陵から続く傾斜地には中世集落跡と思われる西谷遺跡が所在している。試掘調査により鎌倉～室町時代の山茶碗や大窯製品が確認されている。さらに丘陵頂部には金井城跡、縄生廃寺もみられる。また本遺跡と同地区内、東へ約１ｋｍのところにある桑部城跡は員弁川流域の代表的な中世城館のひとつである。[3)]

本遺跡を含む桑部地区は、古くは大字志知に鎮座する式内平群神社を神祖とし、市内久米地区から三重郡朝日町（旧朝明群）の縄生地区まで包括した久米郷を形成する支郷のひとつとされている。また中世においては『吾妻鏡』等に登場する益田荘に所属し、近世以降は能部・桑部・西金井・東金井の四大字から成る桑部村を形成した。[4)]

註

1）　『桑名市遺跡分布地図』　桑名市教育委員会　1995

2）　『西金井遺跡発掘調査報告書』　桑名市教育委員会　1993

3）　『桑名市文化財調査報告書　平成８年』 桑名市教育委員会　19979

4）　『桑名市史』　桑名市教育委員会　1959

第２章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

平成９年４月８日付教社第 24 号にて、桑名市篠原東農住組合設立準備会発起人代表中久木久道より、農住組合による土地区画整理事業に際して、桑名市大字桑部字篠原地内の約１ha について、文化財の所在の有無及びその取扱いを照会する文書が桑名市教育委員会に提出された。

市教育委員会は事業予定地は周知の遺跡である篠原遺跡（市遺跡 No. 113）の範囲内であり、開発を行う場合は文化財保護法に基づく事前の発掘調査が必要な旨を回答した。

桑名市篠原東農住組合組合長理事中久木久道より、平成９年７月 14 日付教社第 24 の３号で文化財保護法第 57 条の２第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出を受けた市教育委員会では、遺構の有無及び残存状況の確認を行うことを主目的に、開発範囲に対して試掘調査を行った。試掘調査は桑名市篠原東農住組合の協力のもと、トレンチ調査を平成９年 12 月１日～ 19 日にかけて実施した。調査結果の詳細については第２節で述べるが、開発予定地の南東隅で中世と考えられる遺構面及び遺物包含層が確認された。

その後、試掘調査結果なども参考に協議を重ねたが、現状保存が困難なことが確認されたため、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、桑名市教育委員会文化課文化振興係主事水谷芳春を調査担当者として、平成 10 年４月より着手した。文化庁に対する埋蔵文化財発掘調査着手の報告は、文化財保護法第 98 条の２第１項に基づき、平成 10 年５月 22 日付教文第 69 号にて行った。

第２節　試掘調査

試掘調査は開発予定地に４ｍ×４ｍのトレンチを 17 ケ所設定、順次調査を行った。補助トレンチ及び、トレンチ拡張部分を含めた総調査面積は 380 ㎡である。試掘調査の結果、遺構等が確認されたのは開発面積に比してごくわずかであった。以下に遺構等が検出されたトレンチについて概要を記述する。

なお、現地での測量や発掘区の設定等については文化振興係長小串芳夫の指導、協力を得た。

トレンチ２では中世の遺構と考えられる土坑、溝等が検出され、遺物も山茶碗、伊勢型鍋等の中世遺物がまとまって出土した。トレンチ４では遺構面に炭粒の広がる部分が確認された。何らかの生活の痕跡と思われる。遺物も山茶碗等が出土している。トレンチ 13 では舶載品である白磁を含む大量の遺物が包含層から出土したため、包含層の範囲を確認すべく補助トレンチ 18、19 を設定して掘削を行った。結果は包含層の広がりはごく小規模で、遺構面とともに削平されていることが判明した。検出された部分は部分的に削平を免れていただけであった。遺構も明確なものは検出されなかった。

調査の結果、すべてのトレンチより古墳時代から近世にかけての遺物が出土したものの、トレンチ２、４、13 の３ケ所を除き、近世以降に遺構面が削平を受けていることが判明した。遺物は削平された後に２次的に堆積したものと思われる。また、何れも地山面が遺構面であることが確認された。

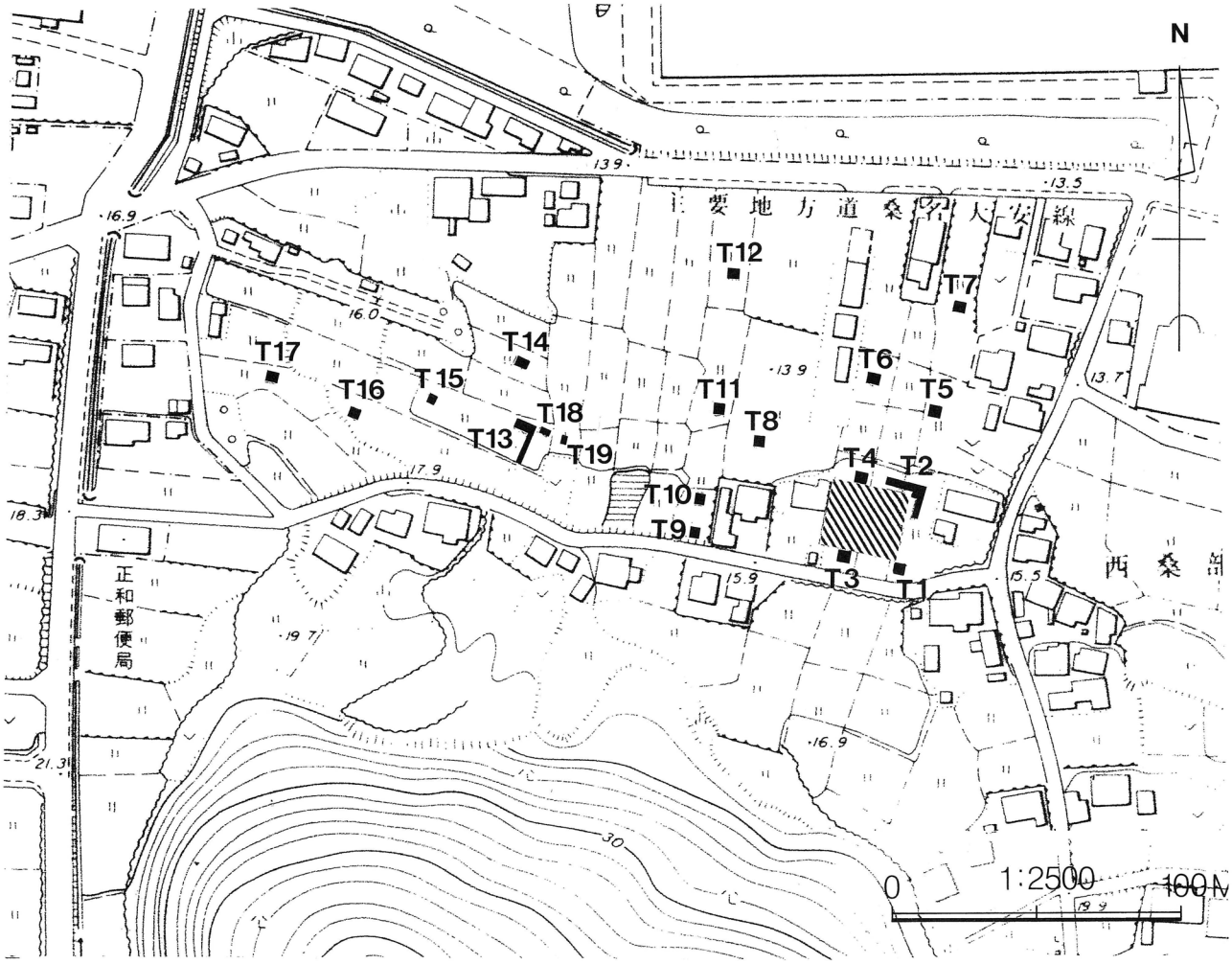
第３節　　調査の経過

発掘調査は平成10年４月６日より開始した。重機により表土層から順次掘削を行ったが、遺物包含層の掘削及び、遺構検出については人力で行った。

４月８日、試掘調査で遺構面が確認されているレベルから、山茶碗等の遺物がまとまって出土し、遺構面と考えられる面が検出されたため精査を行った。遺構面の直上に堆積している土層からは山茶碗や伊勢型鍋等が出土し、後世の遺物が混じらないことから中世の遺物包含層と認識した。また、遺構は地山面に掘り込まれていることが確認され、遺構面からは大規模な土坑が２基検出され、それぞれ土坑１、６とした。

また、柱穴と思われる土坑等が多数検出されたため、詳細な遺構測量の必要が認められた。そこで、ラジコンヘリコプタによる写真測量を行うこととし、株式会社イビソクに業務委託した。測量は遺構検出、掘削の終了した５月１日に実施し、同日調査を終了した。

整理作業は引き続き実施し、図面整理、出土遺物の洗浄、住記、実測、写真撮影等について随時作業を行った、木材の樹種同定については株式会社パレオ・ラボに委託した。これらの委託業務や、その他の整理作業及び、報告書作成は平成13年度にかけて行った。



挿図１　試掘・調査地点位置図　（１/25000）

第３章　調査の成果

第１節　遺構

発掘調査地は東西約 23.7 m南北約 16.8 m、面積にしておよそ 400 ㎡である。調査区内の標高は、極侯 14.60 m、極低 14.02 mで南西から北東に向かってゆるやかに低くなっている。調査以前はそのほとんどが農地として利用されていた。

遺構は調査区全体を通して確認でき、土坑 21 基、ピット（柱穴）67 基が検出された。調査区の中央部には大型の土坑である土坑１があり、これを挟んでおおまかに東と西に別れて土坑と柱穴群が分布してる。大半の土坑・ピットは包含層と同じ暗茶褐色粘質土層が堆積しており、埋没時期に大きな差はほぼ見られないと思われる。

以下に詳細を述べる。

土坑１

調査区のほぼ中央やや北側よりに位置する、検出した中で最も大きな土坑。平面形は直径 4.50 m の不整円形。断面形はなだらかな擂鉢型の形状を呈し、検出面から深さ 1.22 mを測る。また土坑の周囲には土坑を囲むように、南北に長い楕円形の浅い掘込みがみられる。土坑内の南西部には階段状に杭が打ち込まれた箇所があり、階段部材と考えられる板状の木材も出土している。埋土には多量の遺物と炭粒が含まれていた。最下層の淡黒褐色粘質炭混土層は帯水により還元されている。

土坑２

調査区の西側中央部に位置している。平面形は長径 0.83 m短径 0.55 mの楕円形。断面形は中央が若干窪む皿状で、検出面からの深さは 0.28 mである。

土坑３

調査区の北側中央に位置している。平面形は直径 0.86 mの不整円形。断面形は底面が概ね平坦な箱状で、検出面からの深さは 0.23 mである。土坑中央部にはピット 35 があるが、切り合いなどは確認できない。

土坑４

調査区の北側中央、土坑１と土坑３の間に位置している。平面形は直径 0.55 mの不整円形。断面形は底部が概ね平坦な箱状で、検出面からの深さ 0.20 mである。ピット 36 と隣接しているが、切り合いなどは確認できない。

土坑５

調査区北東やや中央よりに位置する土坑。平面形は長径 2.17 m短径 1.48 mの不整楕円形。断面形は検出面からの深さ 0.12 mの皿状で、底部は南側がやや低くなっている。土坑の中央部にピット 44 があるが、土層の切り合い関係から土坑５が埋まった後に掘り込まれたものと考えられる。出土した遺物などからピット群より発掘時期が古くなると思われる。

土坑６

調査区の北側中央、土坑１のすぐ東に位置している。平面図は長径 1.52 mの不整円形。断面図は擂鉢状で､検出面からの深さは 1.91 mである。規模は小さいものの埋土の堆積状況は土坑１と類似し、

最下部の淡黒褐色粘質土層は滞水により還元されている。

土坑７

調査区の北東端に位置している。平面形は長径0.55ｍ短径0.40ｍの楕円形。断面形は．擂鉢状で、検出面からの深さは0.38ｍである。

土坑８

調査区の南側中央に位置する土坑。平面形は直径0.55ｍの不整円形。断面形は浅い皿状で、検出面からの深さは0.15ｍである。

土坑９

調査区の南側中央に位置する土坑。平面形は直径0.56ｍの不整円形。断面形は浅い皿状で、検出面からの深さは0.08ｍである。

土坑10

調査区中央やや東よりに位置する。平面形は長径1.30ｍ短径0.50ｍの不整楕円形。断面形は皿状で、検出面からの深さは0.52ｍである。二箇所に窪みを持ち、複数の土坑が重複している可能性がある。

土坑11

調査区の北東端に位置し、土坑７と隣接する土坑。平面形は直径0.80ｍの不整円形。断面形は擂鉢状で、検出面からの深さは0.76ｍである。

土坑12

調査区の南側中央に位置し、土坑８・土坑９と隣接する土坑。平面形は直径0.54ｍの不整円形。断面形は底部が浅く平坦な箱状で、検出面からの深さは0.10ｍである。

土坑13

調査区中央やや東より、土坑10の東に位置する土坑。平面形は直径0.72ｍの不整円形。

土坑14

調査区の南側中央やや東よりに位置する土坑。平面形は長径1.36ｍ短径1.08ｍの不整楕円形。断面形は底部が概ね平坦な浅い皿状で、検出面からの深さは0.18ｍである。

土坑15

調査区の南側中央やや東より、土坑14の北東に隣接する土坑。平面形は長径0.68ｍ短径0.36ｍの隅丸三角形。断面形は底部西側が低い箱状で、検出面からの深さは0.16ｍである。土坑中央にピット66が存在するが、切り合いは確認できない。

土坑16

調査区の南側中央やや東より、土坑14・土坑15に隣接する土坑。平面形は長径0.95ｍ短径0.47ｍの隅丸三角形。断面形は底面が平坦な浅い箱状で、検出面からの深さは0.12ｍである。

土坑17・18

調査区の中央最南端に位置する土坑。平面形は長径0.48ｍ短径0.23ｍの不整楕円形である。二つの浅い皿状土坑が重複しており、それぞれ土坑17・18と認識した。切り合いは確認できない。検出面からの深さは0.10ｍである。

土坑19

調査区の南東に位置する土坑。平面形は長径1.06短径0.45ｍの不整楕円形。断面形は底部西側が低い箱状で、検出面からの深さは0.19ｍである。

土坑 20

調査区の南東に位置する土坑。平面形は直径 0.17 mの円形。断面形は箱状で、検出面からの深さは 0.12 mである。

土坑 21

調査区の南東、土坑 20 に隣接する土坑。平面形は直径 0.44 mの不整円形。断面形は浅い皿状で、検出面からの深さは 0.11 mである。

ピット群

ピット群は配置や広がり等も明らかではなく、出土遺物も小破片が多いため詳細な性格を把握することは難しい。唯一、ピット 40 では柱根が確認されているが、周辺のピット及び土坑との関連性は把握できない。よってここでは直径や検出面からの深さなどを（表２）として示すことにする。

第２節　遺物

調査区全域はいわゆる遺物包含層である炭混じりの暗茶褐色粘質土層（図版４の①層）に覆われており、その遺物包含層を中心にコンテナケース約７箱分の遺物が出土している。出土遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、輸入陶磁、常滑窯・瀬戸美濃窯産の陶器類などが確認できる。以下、主な出土遺物を遺構別に記述する。法量、調整等の詳細は遺物観察表（表３・４）を参照されたい。

ピット８

土師質の土錘（１）が出土。全長 3.5㎝ 直径 0.8㎝ の円柱形で器壁は薄い。胎土に貝の微細な破片がごく少量含まれる。摩耗が激しく、調整痕・使用痕等は看取できない。

ピット 15

須恵器の長頸瓶（２）が口縁部のみ出土。口縁端部に平坦面を有し､内面に若干の降灰がみられる。

ピット 24

いわゆる伊勢型鍋と呼ばれる土師質の煮炊具（３）が出土。口縁端部の折り返しは弱く摘み上げ状になる。

ピット 44

瓷器系中世陶器第Ⅱ類の碗・小碗（小皿)、いわゆる山茶碗（４）が出土。ほぼ完形でピットの最下部に伏せた状態で検出された。体部は丸みを持ちつつ、やや外側に開き気味に立ち上がる。高台は高く造りも良い。高台には砂粒痕がみられる。内面には灰白色の付着物が若干確認できるが、詳細は不明である。

土坑１

土師器（皿、高杯、煮炊具)、須恵器（甕･壺類、碗･杯類)、灰釉陶器（碗･皿類、袋物)、輸入陶磁（白磁碗)、山茶碗（碗･小碗･小皿･鉢）などが出土している。量的に大部分を占めるのは山茶碗であり、コンテナケース１箱分が出土している。

土師器の皿は非ロクロ成形であり、口縁周辺が肥厚し側面にヨコナデによる平坦面をもつもの（５)、

ほぼ均一な厚みを持ち口縁部が立ち上がるもの（６）がみられる。煮炊具はいわゆる伊勢型鍋（７～13)が出土している。口縁端部の返りが弱く摘み上げ状になるものや、丸味を若干残すものが見られる。

須恵器はいわゆる薬壺と呼ばれる短頸壺（14）のほか、甕類（15～18）が確認できる。

山茶碗は碗･小碗（小皿）（19～37)、鉢（38）が確認できる。すべて東海地方南部系のものである。輸入磁器の白磁碗は大型の玉縁状の口縁を持つもの（40～42）と口縁部がやや外反し端部に平坦面を有するもの（43）が見られる。いずれも口縁部のみ出土している。

その他、金属製品（44）も見られる。

土坑５

土師器（高杯、甕・壺類）が出土している。高杯は図化していないが、口縁端部から３cmのところでく字状に屈曲する。器壁が薄く、高台端部が内側に折り返される台付甕（45）や、底部が平坦となる小壺（46）がみられる。胎土や形状などの特徴から古墳時代のものに近いと思われるが、小破片であるため断定はできない。

遺物包含層

土師器は高杯（47)、台付甕等の甕類（48)、Ｓ字状口縁台付甕（49）のほか、非ロクロ成形の小皿、底部に糸切痕のみられるロクロ成形の椀、いわゆる伊勢型鍋と呼ばれる煮炊具（50、51)、器台、土錘などの破片がみられる。

須恵器は杯類が少量出土する他は甕・瓶類の体破片がほとんどであり、年代を特定することは困難である。(52）は短頸壺（53）は甕（54）は瑯。全体的に焼き締まりの良好なものが多く、甕には外面に平行状の叩きが施されているもの（55）が大半を占めるが、擬格子文が施されているもの（56）もある。

灰釉陶器は椀・皿類のほか、壺・瓶などの袋物類の破片が少量出土している。小破片や体部片であるため、年代の特定までには至らない。

輸入磁器は白磁の碗が数点出土しており、玉縁状の口縁を有するもの（69）がみられる。いずれも口縁部のみ出土している。

本遺跡で量的にもっとも多く出土しているのがいわゆる山茶碗（57～68）である。東海地方南部系のいわゆる荒肌手と称される粗雑な胎土のもので、灰白色を呈し焼き締まりの良好なものがほとんどである。内面に降灰や、重ね焼きによる高台の融着がみられるものも多く含まれている。内面に煤が厚く付着しているもの（22）も確認できる。

その他、瀬戸美濃窯産の天目茶碗･灰釉丸碗（70)、擂鉢（72～74)、常滑窯産の甕、いぶし瓦（75)、金属製品では断面がほぼ正方形となる鉄釘（76)、板状に加工された木製品や杭なども少量出土している。

第３節　出土木材の樹種同定

１．樹種同定の方法

組織標本は、片刃の剃刀を用いて材の横断面（木口）・接線断面（板目）・放射断面（柾目）の３方向を薄く剥ぎ取りスライドグラスの上に並べ、ガムクロラールで封入し永久プレパラートを作成した。そして光学顕微鏡を用いてこれらの材組織を観察し同定を行った。永久プレパラートは（株）パレオ・ラボに保管してある。

２．結果とまとめ

厚みが約 0.5cm で幅が２～４cm の比較的小さな薄板状の３点はすべてヒノキであり、階段部材もヒノキであった。角状のほぞ穴がある材はアカガシ亜属、Ｐ 40 注根と杭はマツ属複維管束亜属であった。直径４～ 9.5cm の樹皮付きで枝材と思われる自然木３点はすべてマツ属複維管束亜属であった。

薄板状の加工材には割裂性のよいヒノキが使われ、柱や杭には耐水性に優れたマツ属複維管束亜属が使用されていた。調査資料が少ないながら、このような明瞭な樹種選択性が認められた。

同定された樹種の材組織記載

表１　篠原遺跡出土木材の樹種同定結果

試料	遺構	樹種	形状	時期
Ｗ１	ＳＫ１	ヒノキ	薄板状	平安～鎌倉
Ｗ２	ＳＫ１	ヒノキ	薄板状	平安～鎌倉
Ｗ３	ＳＫ１	ヒノキ	階段部材	平安～鎌倉
Ｗ４	ＳＫ１東ベルト北西	アカガシ亜属	角形ほぞ穴あり	平安～鎌倉
Ｗ５	ＳＫ１	ヒノキ	薄板状	平安～鎌倉
Ｗ６	Ｐ40	マツ属複維管束亜属	注根	平安～鎌倉
Ｗ７	ＳＫ１	マツ属複維管束亜属	杭	平安～鎌倉
Ｗ８	ＳＫ１	マツ属複維管束亜属	自然木	平安～鎌倉
Ｗ９	ＳＫ６	マツ属複維管束亜属	自然木	平安～鎌倉
W10	ＳＫ６	マツ属複維管束亜属	自然木	平安～鎌倉

（１）ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Endl.　図版 15　1a.-1c.（Ｗ５）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材部の量は非常に少ない。樹脂細胞は年輪の後半に多い。分野壁孔は大きく輪郭は丸く、孔口はやや斜めに細く開いたヒノキ型で、１分野に２～４個あり、おもに２個が水平に整然と配列する。

ヒノキは本州の福島県以南のやや乾燥した尾根や岩上に生育し、材は耐久性・切削性・割裂性にすぐれる。

（２）マツ属複維管束亜属　*Pinus subgen. Diploxylon*　マツ科　図版 15　２a.－２c.（Ｗ４）

垂直・水平樹脂道がある針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかで晩材の量は多く、垂直樹脂道はおもに晩材部に多く分布している。分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状の肥厚

があるがあまり顕著ではなく、それが不朽しているためなのか、肥厚がなだらかなクロマツであるのか、判断できなかった試料である。

マツ属複維管束亜属にはアカマツとクロマツがあり、自然分布ではアカマツは内陸部に、クロマツは海岸部に多いといわれている。

（３）コナラ属アカガシ亜属　*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*　ブナ科　図版 15　３a.－３c.（Ｗ８）

集合放射組織を挟み小型～中型の単独管孔が放射方向に配列する放射孔材。接線状の柔組織が顕著である。道管の壁孔は小さく交互状、穿孔は単一で、内腔にはチロースが発達している。放射組織は同性、単列のものと広い放射組織とがあり、道管との壁孔は孔口が大きく、柵状・交互状のものがある。

アカガシ亜属はいわゆるカシ類の仲間でおもに暖温帯に分布する。山野に普通なアラカシ・アカガシ・シラカシ、関東以南に多いイチイガシ・ツクバネガシ、海岸や乾燥地に多いウバメガシ、寒さに強くブナ帯の下部まで分布するウラジロガシなどがある。材は丈夫で弾性や耐湿性があり、農具として用いられる代表的樹種である。

第４章　まとめ

本章では特徴的な遺構についてその性格等を考えるとともに、出土遺物から遺跡の年代等を推測し、調査のまとめとしたい。

土坑１（集水遺構）について

土坑１はその規模や埋土の堆積状況が、検出された他の遺構と大きく異なっている。断面擂鉢状を呈する深い掘り込みの周囲に浅い掘り込みが広範囲にみられること、また規模も、浅い掘り込み部分を含めると直径 4.5 m、深さ 1.2 mと大きく、平均して直径 1.0 ～ 1.5 m、深さ 0.1 ～ 0.2 mの土坑が多くみられる中で、際立って特異なものである。埋土の堆積状況も他の土坑・ピットのほとんどが暗茶褐色粘質炭混土層、すなわち遺物包含層のみ堆積しているのに対し、土坑１では複数の土層が徐に堆積したことが確認できる。遺物も多く出土しているが、出土状況や埋土の堆積状況からはいわゆる廃棄土坑とは考えにくい。

前述したように、本遺跡は南側の丘陵から員弁川に向かって低くなるごく緩やかな傾斜地に立地し伏流水が流れ込みやすい地質的特徴も備えている。このような環境の中で、土坑１は下層の粘質土層まで深く掘り込まれており、伏流水を溜めることを意図して掘削されたのではないかと考えられる。加えて土坑の平面積を大きくとってあることも、雨水の集積を考慮したものではないかと推測できる。

また、南西部の中段付近に打ち込まれた杭の周辺には、板状に加工された木製品が数点出土している。これらは杭も含め、階段状に板を組み合わせていたとも考えられよう。

以上の点から、土坑１は井戸や水汲み場といった性格を持つものと考えられる。土坑６は土坑１と比較して規模は小さいものの、深さや埋土の堆積状況が土坑１に類似しており、同様に井戸としての性格を持った遺構であると思われる。土坑１との時期的な関連は切り合い関係にないため判断しがたい。

土坑５について

切り合いの確認できる遺構は発掘区全体で５基あるが、時期がある程度確認できるのは遺物が出土している土坑５のみである。土坑５の出土遺物は小破片で出土量もごく少量なため、明確な年代の特定は難しいが古墳時代の特徴に近いものと考えられる。

土坑５と切り合い関係にあるのはピット 43・44・47 の３基だが、このうちピット 47 からは遺物は出土していない。ピット 43 からは中世のものと考えられる土師器の煮炊具が、土坑５の中央付近にあるピット 44 からは 12 世紀中頃の山茶碗が出土している。土坑３からも土坑５のものと比較的類似した遺物が出土しているので、中世集落が形成される以前に古墳時代以降の遺跡が存在していた可能性が考えられる。

出土遺物と遺跡の年代について

篠原遺跡から出土した遺物は、主に東海地方で生産された日常雑器と考えられるいわゆる山茶碗が量的に最も多く出土している。やや粗雑で灰白色を呈する胎土をもつものが多く、藤沢良祐の山茶碗

編年の第４～６型式に概ね該当し、その中でも 12 世紀後葉に比定される第５型式のものが最も多く確認できる。[1)]

同時期の遺物として考えられるのが輸入磁器の白磁碗である。玉縁状の口縁部を有するもの(Ⅳ類)と口縁が「く」字状に外反し端部に平坦面を持つもの（Ⅱ～Ⅷ類）の２種類の白磁碗が確認できる。いずれも口縁部のみの小破片のため個々の特定は難しいが、その特徴から概ね 12 ～ 13 世紀に該当するものと思われる。[2)]

その他、同時期のものには土師器の煮炊具、いわゆる伊勢型鍋が挙げられる。口縁周辺の小破片の出土ではあるが、口縁端部の折り返しが弱く丸味を残したものが多く見られるため、12 世紀後葉から 13 世紀前葉にかけてのものと考えられる。[3)]

以上から、篠原遺跡は概ね 12 世紀中頃から 13 世紀中頃にかけて集落が営まれていたものと考えられる。また、前述したように中世の集落が形成される以前においても、古墳時代以降の集落等が存在した可能性も指摘できる。その他、須恵器や灰釉陶器等も少量だが出土しており、古墳時代以降連綿と生活が営まれてきた可能性も示唆することができよう。

本遺跡の他にも員弁川流域には多数の遺跡が確認されており、近年発掘調査の行われた遺跡も少なくない。

南岸では本遺跡から東に 1.5km の場所に西金井遺跡がある。平成４年に発掘調査[4)]が行われ、第３型式の山茶碗等の出土が確認されているため、本遺跡より若干先行する遺跡と思われる。西金井遺跡の南側の丘陵部には西谷遺跡があり、平成８年の試掘調査で 12 ～ 13 世紀の山茶碗や常滑甕などが確認されている。[5)] 北岸には平成 12 年に発掘調査が行われた宇賀遺跡が所在する。中世面での遺構は確認されなかったが 12 世紀後半から 13 世紀中頃の山茶碗が多く出土している。

これらは調査面積が異なるため一概に比較はできないが、中世段階での員弁川流域には長期にわたって幾つかの集落が形成されていたことが窺える。その背景は現段階では詳らかにできないが、篠原遺跡もその一翼を担った遺跡である事は間違いない。今回の調査は員弁川流域の、特に河口部での中世集落の成立について新な知見をもたらした点で意義深いものであったと言えよう。

註

1）　『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要Ⅰ』 瀬戸市歴史民俗資料館　1982

2）　横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について―型式分類と編年を中心として―」『九州歴史資料館研究論集』 1978

3）　『第４回　東海考古学フォーラム　鍋と甕そのデザイン』 東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会　1996

4）　『西金井遺跡発掘調査報告書』 桑名市教育委員会　1993

5）　『桑名市文化財報告書　平成８年』 桑名市教育委員会　1997

6）　『宇賀遺跡発掘調査報告書』 桑名市教育委員会　2001

表２　ピット計測表

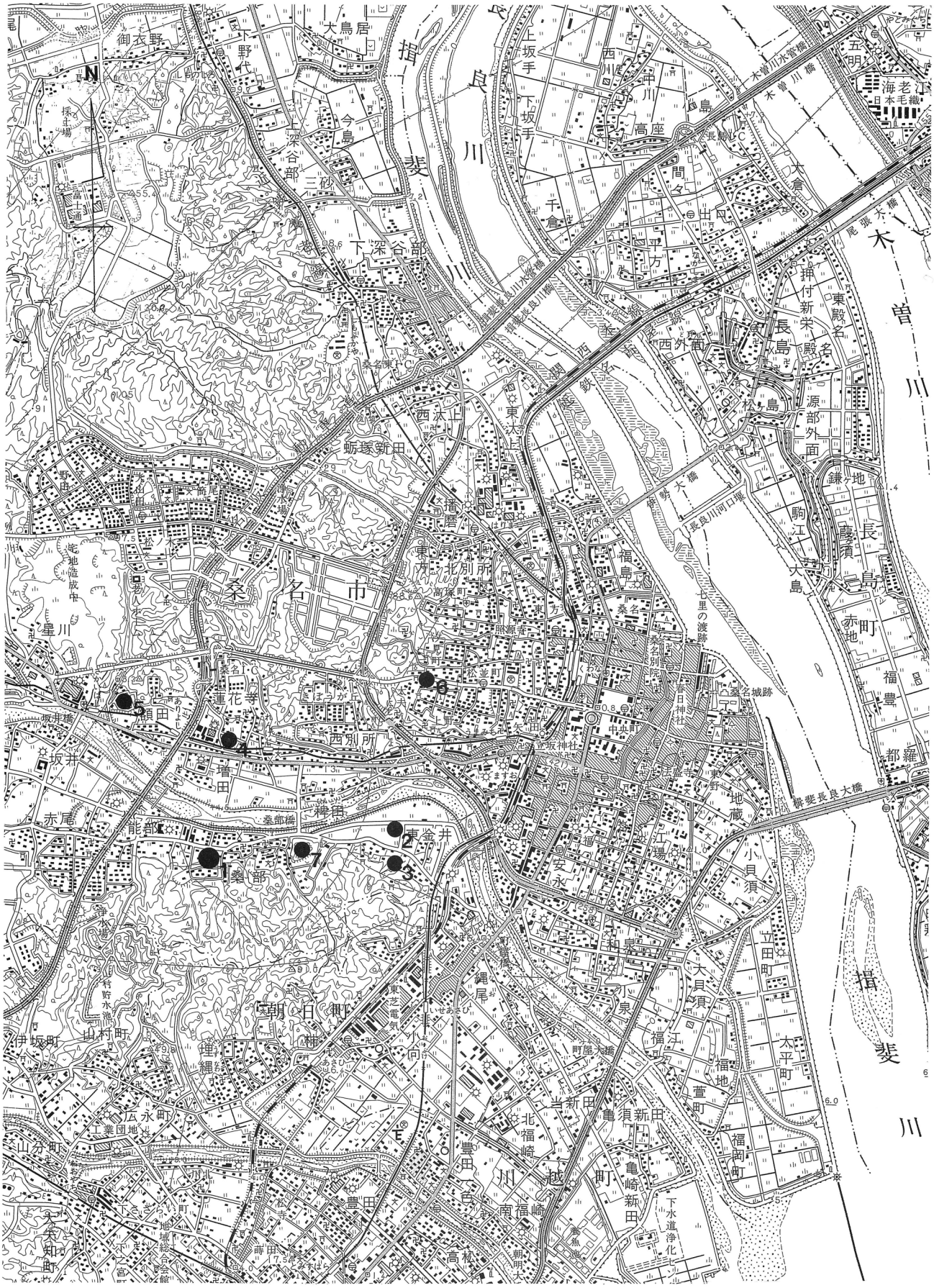
遺構名	直径(m)	深さ(m)	底部レベル高(m)	遺構名	直径(m)	深さ(m)	底部レベル高(m)
ピット１	0.28	0.25	14.030	ピット３５	0.26	0.12	13.890
ピット２	0.20	0.23	14.050	ピット３６	0.20	0.08	13.970
ピット３	0.39	0.23	14.020	ピット３７	0.22	0.22	14.210
ピット４	0.25	0.20	14.110	ピット３８	0.40	0.21	14.010
ピット５	0.38	0.18	14.110	ピット３９	0.43	0.15	14.080
ピット６	0.26	0.15	14.220	ピット４０	0.30	0.54	13.660
ピット７	0.29	0.31	13.950	ピット４１	0.27	0.18	14.020
ピット８	0.43	0.31	13.980	ピット４２	0.35		
ピット９	0.25	0.09	14.300	ピット４３	0.25		
ピット１０	0.30	0.33	14.070	ピット４４	0.42	0.30	13.770
ピット１１	0.18	0.10	14.300	ピット４５	0.36	0.20	14.000
ピット１２	0.20	0.12	14.200	ピット４６	0.29	0.15	14.080
ピット１３	0.22	0.14	14.140	ピット４７	0.26	0.13	14.110
ピット１４	0.31	0.21	14.190	ピット４８	0.39	0.19	13.980
ピット１５	0.25	0.32	14.080	ピット４９	0.26	0.23	13.920
ピット１６	0.26			ピット５０	0.27	0.13	14.080
ピット１７	0.35	0.10	14.270	ピット５１	0.17	0.09	14.050
ピット１８	0.50	0.47	13.920	ピット５２	0.24	0.09	14.080
ピット１９	0.30	0.31	14.100	ピット５３	0.21	0.28	13.920
ピット２０	0.28	0.23	14.010	ピット５４	0.53	0.23	14.170
ピット２１	0.25	0.16	14.290	ピット５５	0.22	0.12	14.060
ピット２２	0.21	0.24	13.940	ピット５６	0.24		
ピット２３	0.29	0.34	13.990	ピット５７	0.25	0.16	14.180
ピット２４	0.43	0.30	14.100	ピット５８	0.45	0.28	13.870
ピット２５	0.22	0.10	14.240	ピット５９	0.29		
ピット２６	0.19	0.14	14.290	ピット６０	0.35	0.10	14.180
ピット２７	0.30	0.14	14.260	ピット６１	0.23	0.11	14.040
ピット２８	0.22	0.19	14.290	ピット６２	0.31	0.19	13.960
ピット２９	0.15	0.16	14.340	ピット６３	0.20	0.14	14.010
ピット３０	0.24	0.26	13.990	ピット６４	0.33		
ピット３１	0.32	0.20	14.220	ピット６５	0.22	0.15	14.010
ピット３２	0.32	0.26	14.030	ピット６６	0.21	0.07	14.250
ピット３３	0.20	0.18	14.050	ピット６７	0.33	0.05	14.440
ピット３４	0.32	0.44	13.860				

表３　遺物観察表　（１）

図版番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)			調整・技法		備考
				口径	器高	底径	内面	外面	
1	ピット8	土師器	土錘	全長3.5　直径0.8					胎土に微細な貝殻混入
2	ピット15	須恵器	長頸瓶	(7.1)			回転ナデ	回転ナデ	8～9c
3	ピット24	土師器	伊勢型鍋				口縁部ヨコナデ、端部折り返し	口縁部ヨコナデ	12c前
4	ピット44	山茶碗	碗	(16.1)	5.0	(7.4)	回転ナデ	回転ナデ、付高台、糸切痕	使用痕、砂粒痕、内面見込み部融着あり、内面に灰白色の付着物あり 12c中
5	土坑1	土師器	小皿	8.5	1.2	5.1	口縁部ヨコナデ、指ナデ	口縁部ヨコナデ、指ナデ	非ロクロ成形
6	土坑1	土師器	小皿				指ナデ	指ナデ	非ロクロ成形
7	土坑1	土師器	伊勢型鍋				口縁部ヨコナデ、端部折り返し	口縁部ヨコナデ	12c前
8	土坑1	土師器	伊勢型鍋				口縁部ヨコナデ、端部折り返し	口縁部ヨコナデ	12c後
9	土坑1	土師器	伊勢型鍋				口縁部ヨコナデ、端部折り返し	口縁部ヨコナデ	12c後
10	土坑1	土師器	伊勢型鍋				口縁部ヨコナデ、端部折り返し	口縁部ヨコナデ	12c後
11	土坑1	土師器	伊勢型鍋				口縁部ヨコナデ、端部折り返し	口縁部ヨコナデ	13c前
12	土坑1	土師器	伊勢型鍋				口縁部ヨコナデ、端部折り返し	口縁部ヨコナデ	13c前
13	土坑1	土師器	伊勢型鍋				口縁部ヨコナデ、端部折り返し	口縁部ヨコナデ	内外面煤付着　13c前
14	土坑1	須恵器	短頸壺			(12.3)	回転ナデ	回転ナデ、付高台	8～9c
15	土坑1	須恵器	甕				同心円状当て具痕	叩き	
16	土坑1	須恵器	甕					平行状叩き	
17	土坑1	須恵器	甕					平行状叩き	
18	土坑1	須恵器	甕						頚部に縦方向の刻線がある
19	土坑1	山茶碗	碗	(16.3)	5.0	(8.4)	回転ナデ	回転ナデ、付高台、板状圧痕	使用痕　12c中
20	土坑1	山茶碗	碗	(15.4)	4.8	(6.7)	回転ナデ	回転ナデ、付高台、糸切痕	使用痕　12c後
21	土坑1	山茶碗	碗	(15.4)	1.8	(7.5)	回転ナデ	回転ナデ、付高台、糸切痕	使用痕、内面煤付着　12c後
22	土坑1	山茶碗	碗			(7.7)	回転ナデ	回転ナデ、付高台、糸切痕	使用痕、籾殻痕、内面煤付着　12c後
23	土坑1	山茶碗	碗			7.4	回転ナデ	回転ナデ、付高台、糸切痕	使用痕、籾殻痕、12c後
24	土坑1	山茶碗	碗			(6.3)	回転ナデ	回転ナデ、付高台、糸切痕	使用痕、籾殻痕、12c後
25	土坑1	山茶碗	碗			6.9	回転ナデ	回転ナデ、付高台、糸切痕、板状圧痕	使用痕、籾殻痕、12c後
26	土坑1	山茶碗	碗	(15.7)	5.0	7.4	回転ナデ	回転ナデ、付高台、糸切痕	使用痕、籾殻痕、13c前
27	土坑1	山茶碗	碗	(16.2)	4.4	(6.2)	回転ナデ	回転ナデ、付高台、糸切痕	使用痕、重焼痕、13c前
28	土坑1	山茶碗	碗			6.9	回転ナデ	回転ナデ、付高台、糸切痕	使用痕、籾殻痕、内面煤付着　13c前
29	土坑1	山茶碗	碗			6.9	回転ナデ	回転ナデ、付高台、糸切痕	使用痕、籾殻痕　13c前
30	土坑1	山茶碗	碗			(7.5)	回転ナデ、指圧痕	回転ナデ、付高台、糸切痕、板状圧痕	使用痕　13c前
31	土坑1	山茶碗	碗			6.1	回転ナデ	回転ナデ、付高台、糸切痕	使用痕、籾殻痕　13c前
32	土坑1	山茶碗	碗			(6.9)	回転ナデ	回転ナデ、付高台、糸切痕	使用痕　13c前
33	土坑1	山茶碗	小碗	(9.2)	3.2	(3.9)	回転ナデ	回転ナデ、付高台	使用痕、重焼痕、12c中
34	土坑1	山茶碗	小皿	8.2	2.5	4.1	回転ナデ	回転ナデ、糸切痕	使用痕　12c後
35	土坑1	山茶碗	小皿	(7.8)	2.6	4.0	回転ナデ	回転ナデ、糸切痕	使用痕　12c後
36	土坑1	山茶碗	小皿	(7.7)	2.0	(3.7)	回転ナデ	回転ナデ、糸切痕	使用痕　12c後
37	土坑1	山茶碗	小皿			4.1	回転ナデ	回転ナデ、糸切痕	使用痕　12c後
38	土坑1	山茶碗	鉢						
39	土坑1	白磁	碗					削り出し高台	
40	土坑1	白磁	碗						玉縁状口縁　Ⅳ類　11～12c
41	土坑1	白磁	碗						玉縁状口縁　Ⅳ類　11～12c
42	土坑1	白磁	碗						玉縁状口縁　Ⅳ類　11～12c
43	土坑1	白磁	碗						外反する口縁端部に平坦面を持つ Ⅱ―Ⅷ類　11～12c
44	土坑1	金属製品	不明						
45	土坑5	土師器	台付甕			(9.8)	指ナデ、端部折り返し、指押さえ	指ナデ	
46	土坑5	土師器	小壺			(2.9)			ミニチュア

表４　遺物観察表　（２）

図版番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)			調整・技法		備考
				口径	器高	底径	内面	外面	
47	包含層	土師器	高杯				搾り痕	ナデ	
48	包含層	土師器	台付甕			(8.0)	指ナデ	指押さえ	
49	包含層	土師器	S字甕				口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	摩耗が著しい
50	包含層	土師器	伊勢型鍋				口縁部ヨコナデ、端部折り返し	口縁部ヨコナデ	12c前
51	包含層	土師器	伊勢型鍋				口縁部ヨコナデ、端部折り返し	口縁部ヨコナデ	13c後
52	包含層	須恵器	短頸壺				口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	
53	包含層	須恵器	甕				口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	
54	包含層	須恵器	甕						
55	包含層	須恵器	甕				ナデ	平行状叩き	
56	包含層	須恵器	甕				同心円状当て具痕	擬格子文	
57	包含層	山茶碗	碗	16.4	5.2	7.6	回転ナデ	回転ナデ、付高台、糸切痕	使用痕、籾殻痕、内面見込み部融着あり　12c中
58	包含層	山茶碗	碗			(6.8)	回転ナデ	回転ナデ、付高台、糸切痕	使用痕、籾殻痕、内面見込み部融着あり　12c中
59	包含層	山茶碗	碗			(7.9)	回転ナデ	回転ナデ、付高台、糸切痕	使用痕　12c後
60	包含層	山茶碗	碗			(7.4)	回転ナデ	回転ナデ、付高台	使用痕、内面見込み部融着あり 12c後
61	包含層	山茶碗	碗			(8.5)	回転ナデ	回転ナデ、付高台、糸切痕	使用痕、籾殻痕、内面見込み部融着あり　12c後
62	包含層	山茶碗	碗			7.5	回転ナデ	回転ナデ、付高台、糸切痕	使用痕、内面見込み部融着あり 12c後
63	包含層	山茶碗	碗			(7.5)	回転ナデ	回転ナデ、付高台、糸切痕	使用痕　12c後
64	包含層	山茶碗	碗			(7.6)	回転ナデ	回転ナデ、付高台、糸切痕	使用痕、籾殻痕、内面見込み部融着あり　12c後
65	包含層	山茶碗	小碗	(9.7)	3.2	(4.7)	回転ナデ	回転ナデ、付高台	使用痕、内面見込み部融着あり 12c中
66	包含層	山茶碗	小碗	(9.5)	2.8	(5.3)	回転ナデ	回転ナデ、付高台、糸切痕	使用痕、籾殻痕、内面全体に降灰 12c　中
67	包含層	山茶碗	小皿			(3.3)	回転ナデ	回転ナデ、糸切痕	使用痕、内面全体に降灰　12c後
68	包含層	山茶碗	小皿				回転ナデ	回転ナデ、糸切痕	使用痕　12c後
69	包含層	白磁	碗						玉縁状口縁　Ⅳ類　11～12c
70	包含層	瀬戸美濃陶器	丸碗				灰釉	灰釉	
71	包含層	瀬戸美濃陶器	鍋?				鉄釉		
72	包含層	瀬戸美濃陶器	擂鉢				鉄釉	鉄釉	
73	包含層	瀬戸美濃陶器	擂鉢				鉄釉	鉄釉	
74	包含層	常滑陶器	甕						
75	包含層	瓦	平瓦						いぶし瓦
76	包含層	鉄製品	鉄釘						断面は正方形
77	T2 南拡張部4層目	土師器	伊勢型鍋				口縁部ヨコナデ、端部折り返し	口縁部ヨコナデ	13c後
78	T2 南拡張部3層目	山茶碗	碗			(7.0)	回転ナデ	回転ナデ、付高台、糸切痕	使用痕　12c後
79	T2排土	山茶碗	碗			(7.3)	回転ナデ	回転ナデ、付高台、糸切痕	使用痕　12c後
80	T2 南拡張部4層目	山茶碗	碗			5.0	回転ナデ	回転ナデ、付高台、糸切痕	使用痕　12c後
81	T2 南拡張部4層目	山茶碗	小皿			(4.3)	回転ナデ	回転ナデ、糸切痕	使用痕　12c後
82	T6一括	土師器	伊勢型鍋				口縁部ヨコナデ、端部折り返し	口縁部ヨコナデ	14c
83	T8一括	石製品	砥石	縦幅9.7 横幅3.8 厚さ1.2					
84	T13 黒褐色土層	山茶碗	小皿	(8.4)	2.0	5.0	回転ナデ	回転ナデ、糸切痕	使用痕、重焼痕　12c後
85	T13 黒褐色土層	山茶碗	碗			4.8	回転ナデ	回転ナデ、付高台、糸切痕	使用痕、籾殻痕、内面煤付着　13c前
86	T13一括	山茶碗	鉢						12c
87	T13 黒褐色土層	白磁	碗						玉縁状口縁　Ⅳ類　11～12c
88	T13 黒褐色土層	加工円盤						灰釉	瀬戸美濃陶器　徳利
89	T18一括	白磁	碗						体部

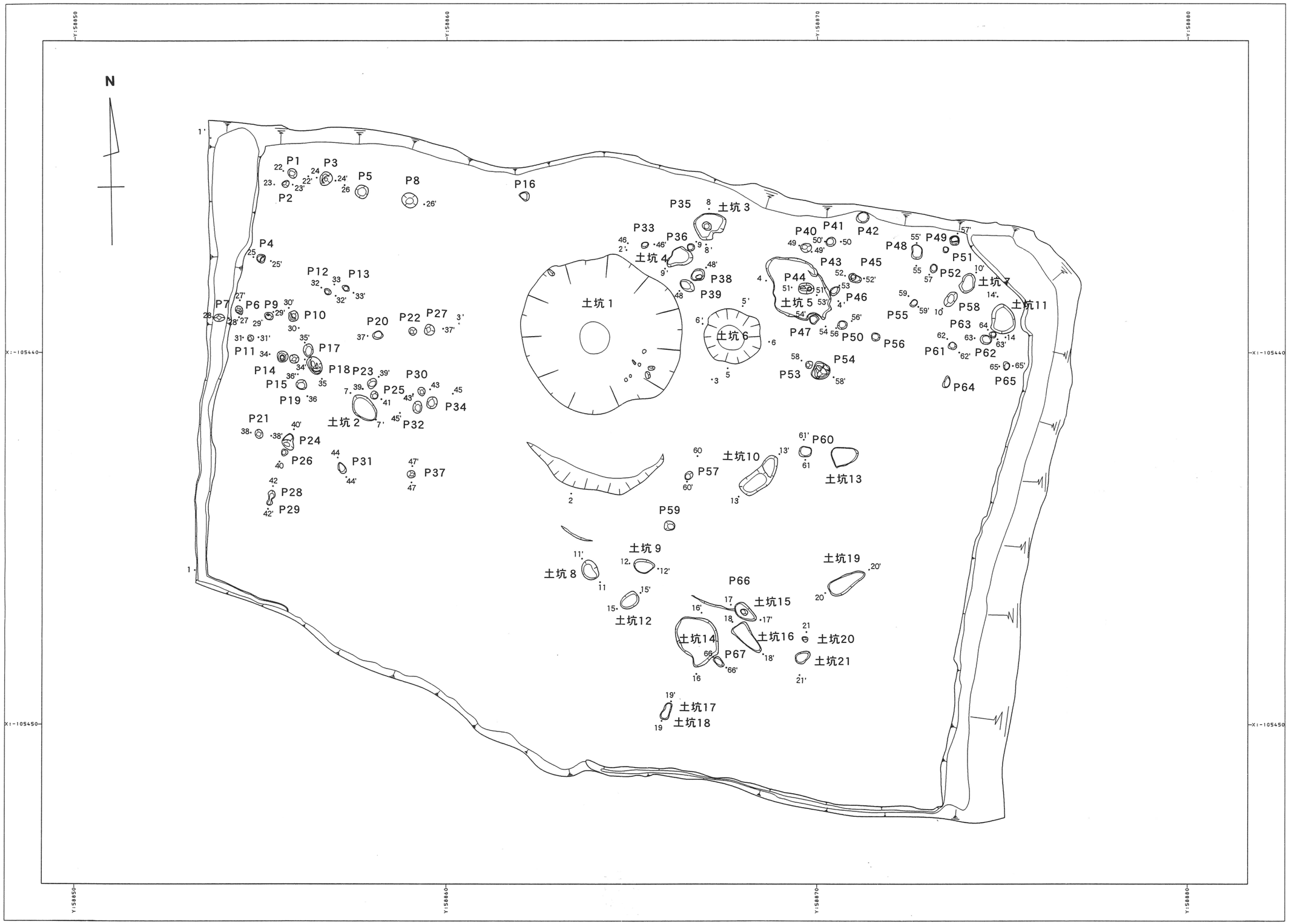


図版１　遺跡位置図　(1/50000)

図版２　周辺地形図　(1/10000)

篠原遺跡

遺構図

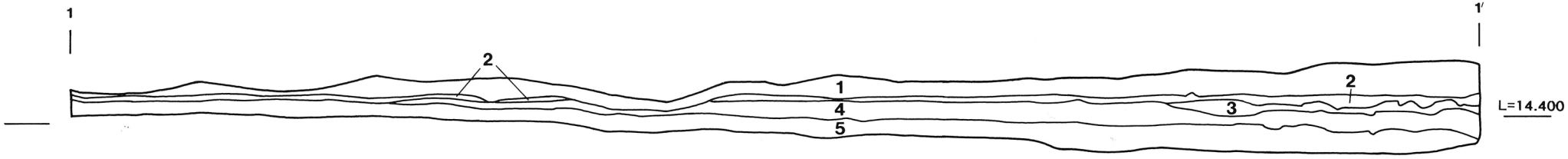


図版３　遺構平面図（1/100）

S＝1：100

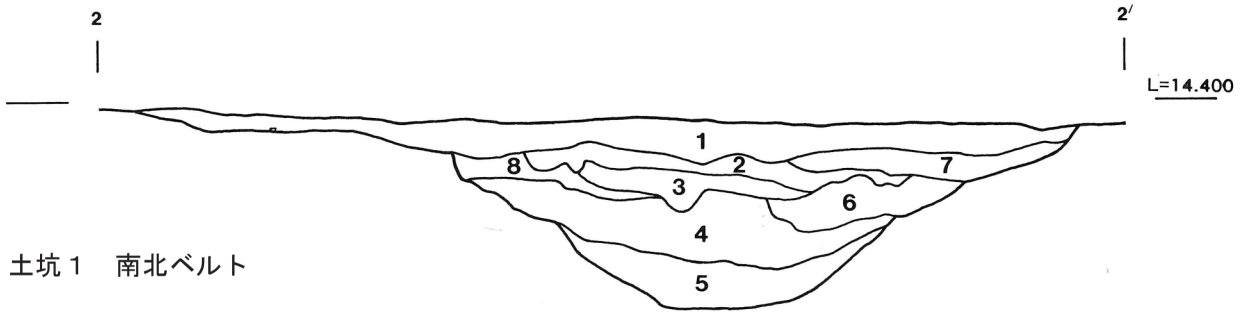
0　1　2　3　4　5　10m

桑名市教育委員会

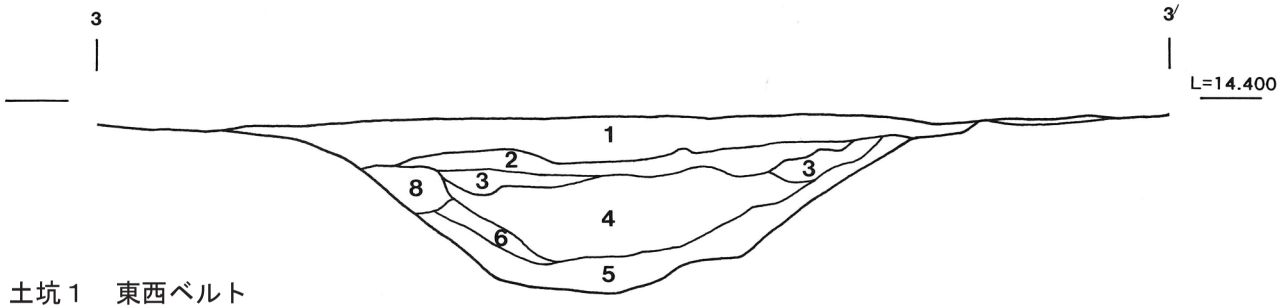


調査区西壁

①暗黄褐色粘質土層（表土層）
②褐色粘質土層
③淡灰褐色砂質土層
④暗茶褐色粘質土層　炭混（遺物包含層）
⑤淡橙褐色粘質土層（地山）



土坑１　南北ベルト

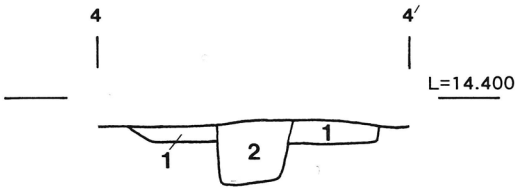


土坑１　東西ベルト

①暗茶褐色粘質土層　炭・地山ブロック混
②淡橙褐色粘質土層　炭・地山ブロック・焼土混
③青灰色砂質土層
④青灰色砂質土層　淡黒褐色粘質ブロック多量混
⑤淡黒褐色粘質土層　炭混
⑥青灰色粘質土層
⑦暗褐色粘質土層　炭混
⑧淡黒褐色粘質土層　炭・地山ブロック混

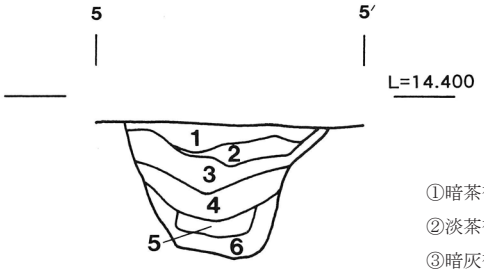
0　1:50　2M

図版４　基本層序　遺構断面図１　(1/50)



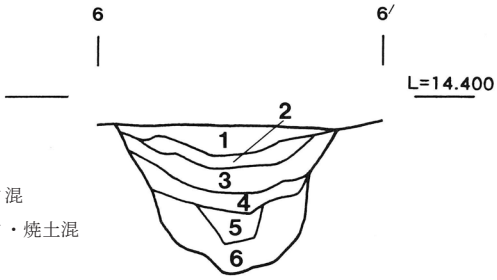
①暗茶褐色カーボン質土層　カーボン多量混
②暗茶褐色粘質土層　炭・地山ブロック混

土坑５　東西ベルト

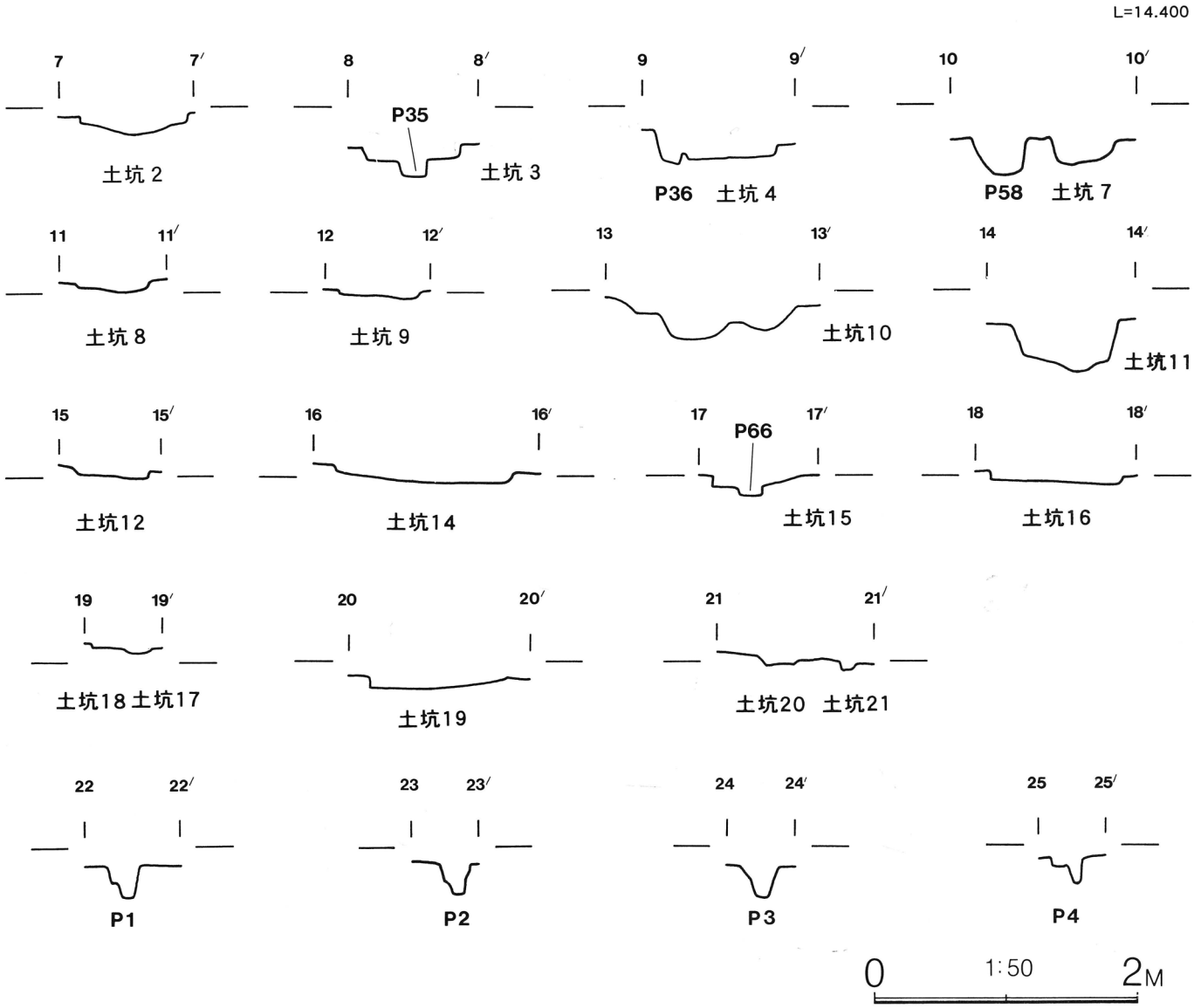


土坑６　南北ベルト

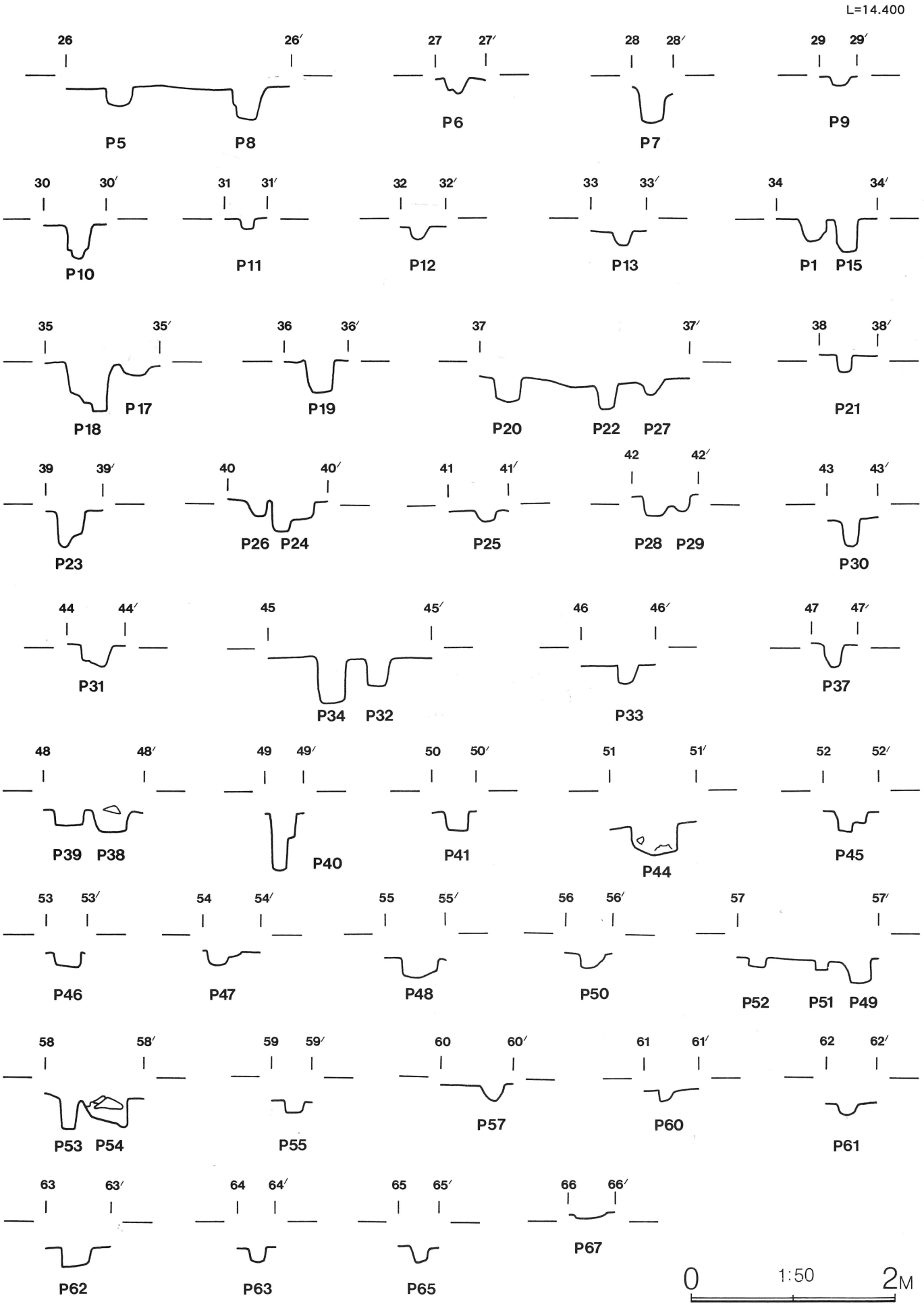
①暗茶褐色粘質土層　炭・地山ブロック混
②淡茶褐色粘質土層　炭・地山ブロック・焼土混
③暗灰褐色砂質土層　炭混
④淡黒褐色粘質土層　地山ブロック混
⑤青灰色粘質土層
⑥淡黒褐色粘質土層　炭混



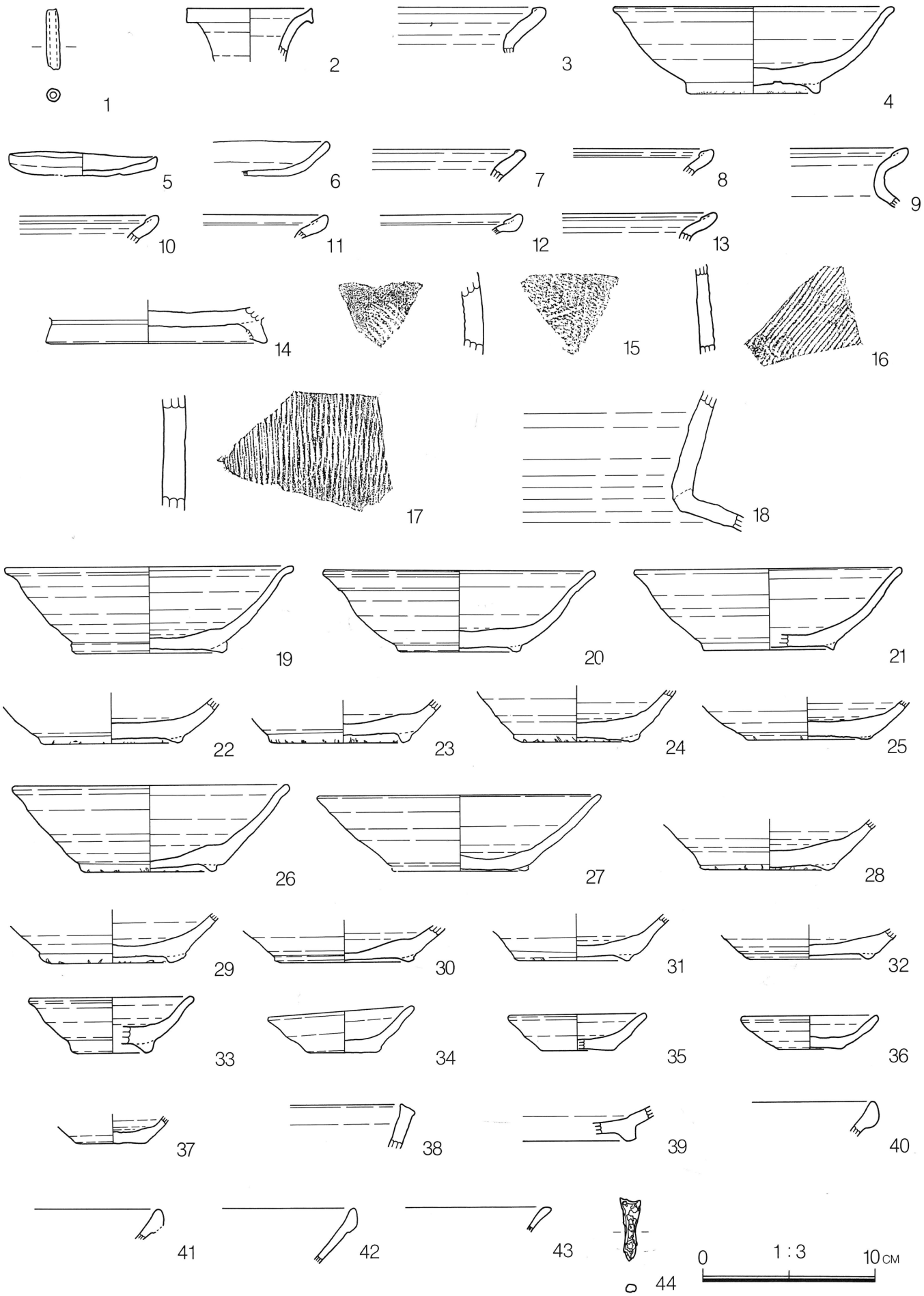
東西ベルト



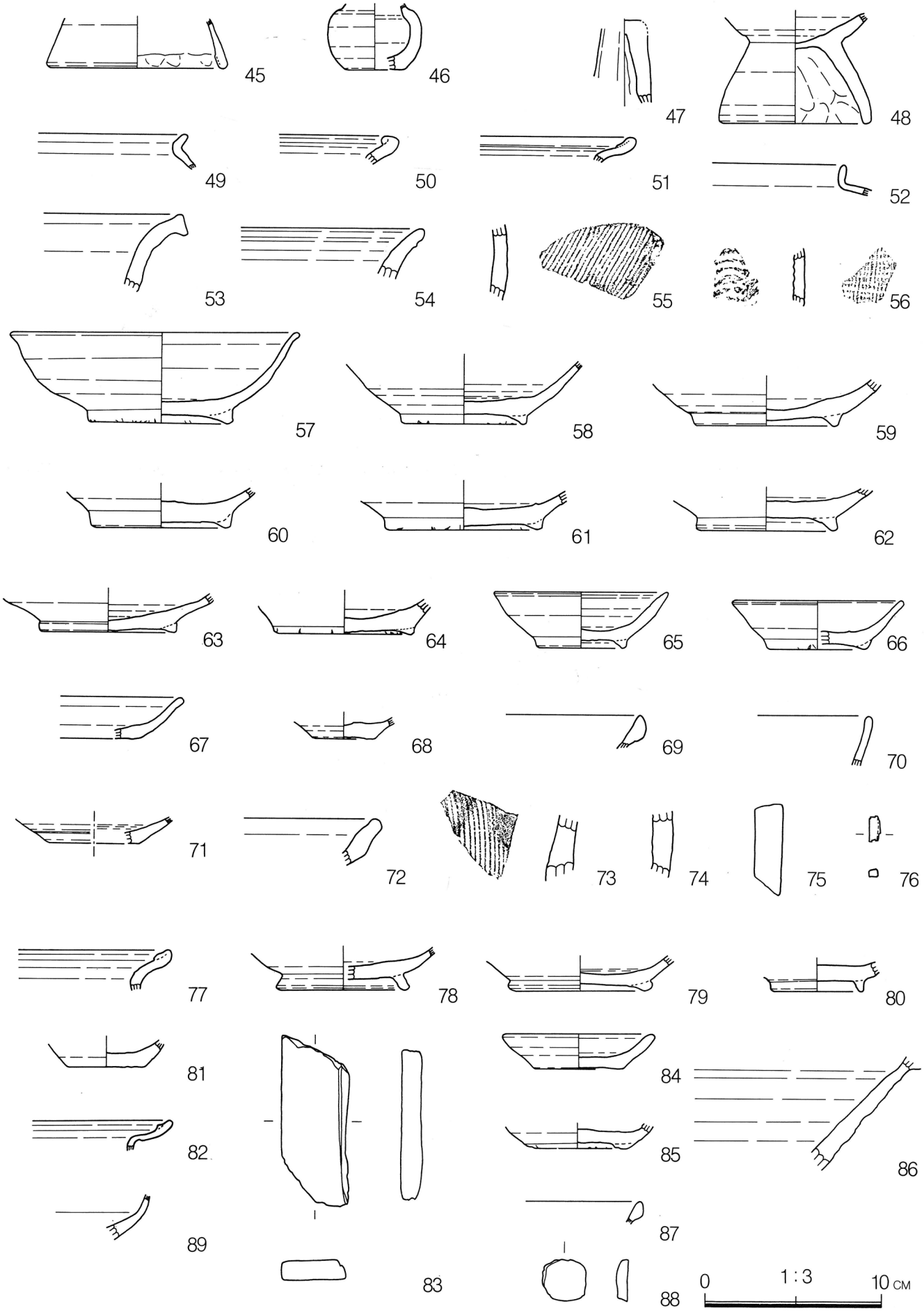
図版５　遺構断面図２　(1/50)



図版６　遺構断面図３　(1/50)

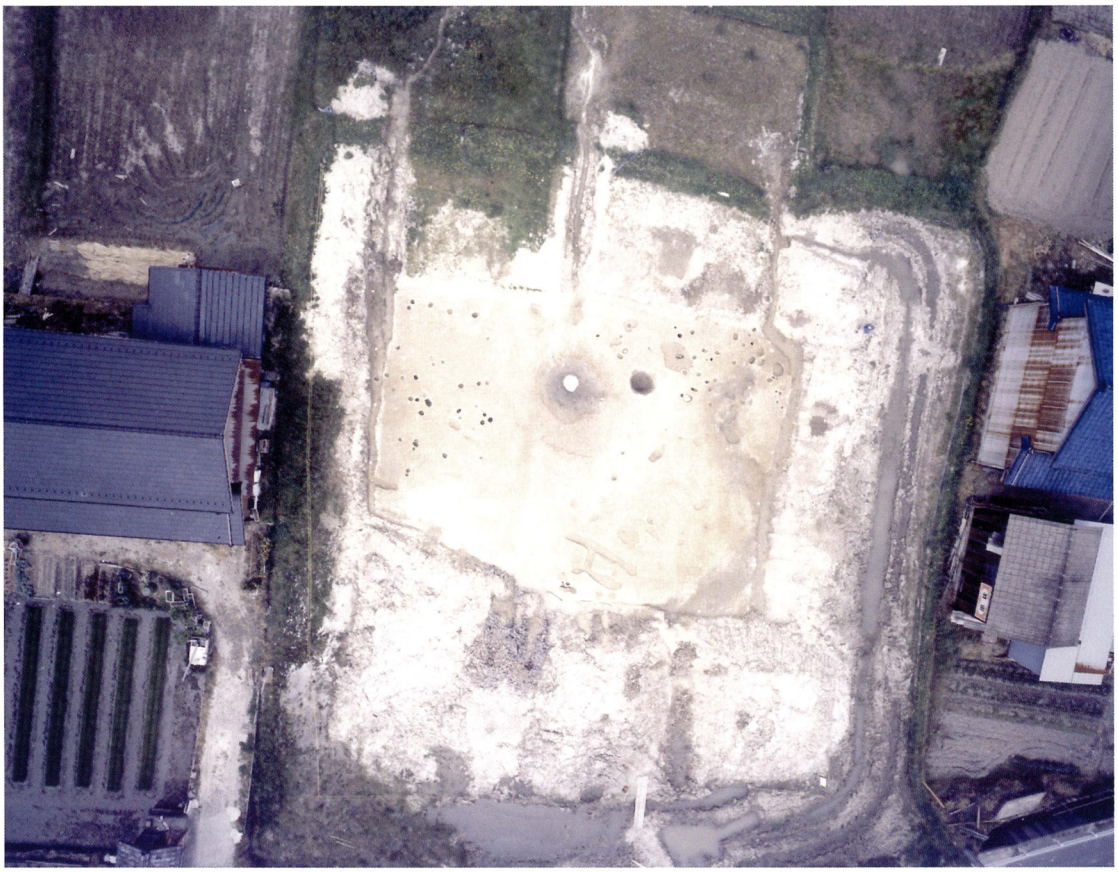


図版７　遺物実測図１　(1/3)



図版８　遺物実測図２　(1/3)

篠原遺跡遠景（北から）

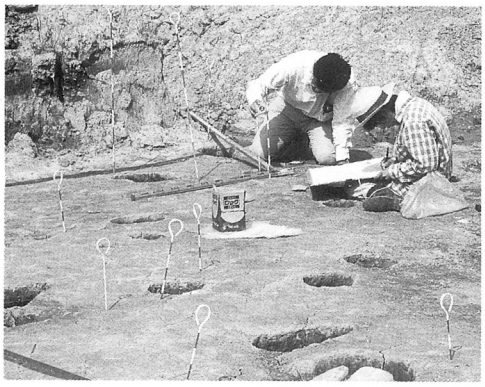


調査区全景

図版９　写真図版　遺構（１）

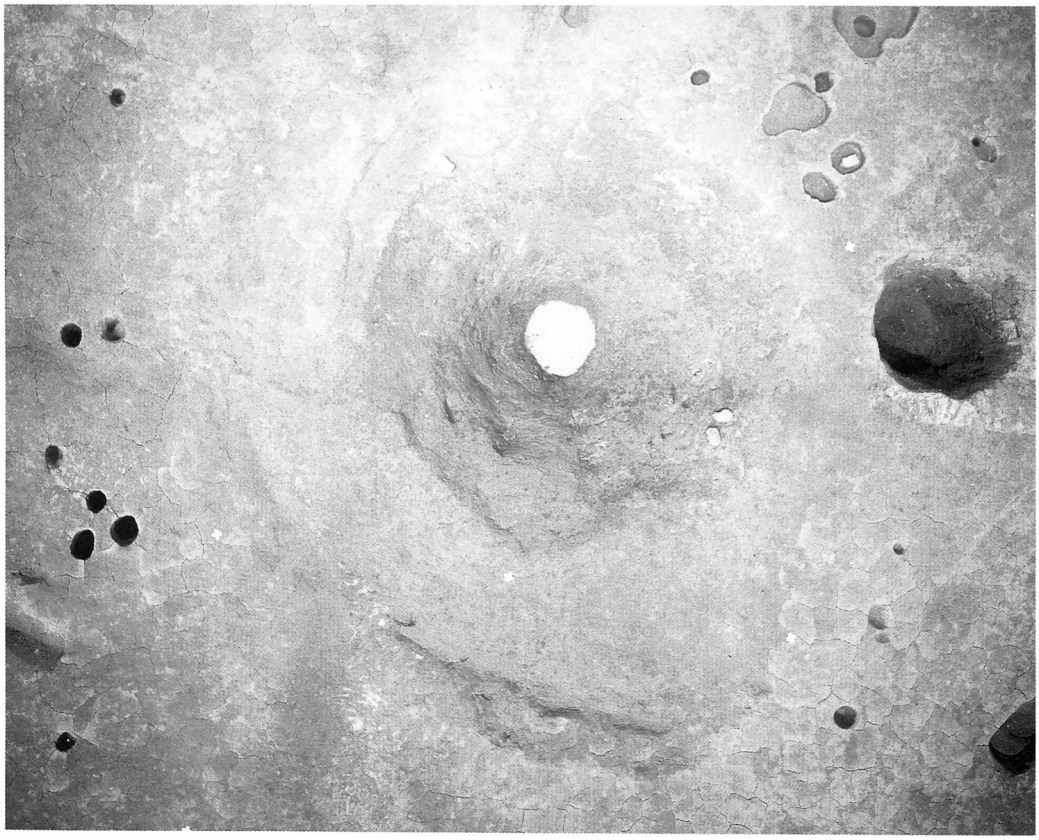
試掘調査

調査区西壁断面



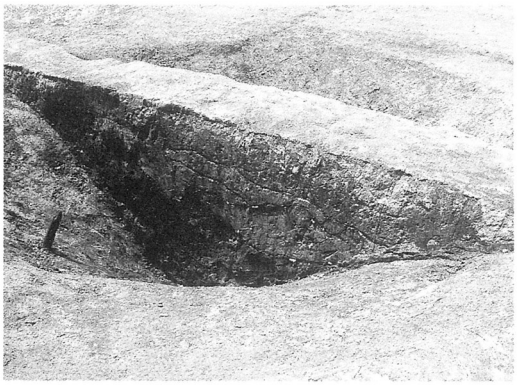
作業風景

作業風景

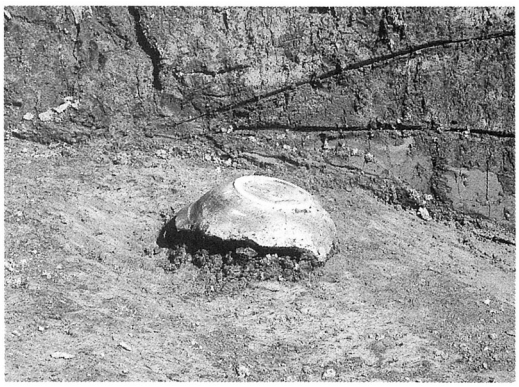


土坑１

図版 10　写真図版　遺構（２）

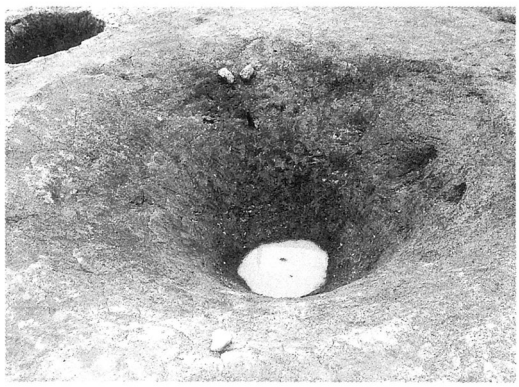


土坑１東西トレンチ

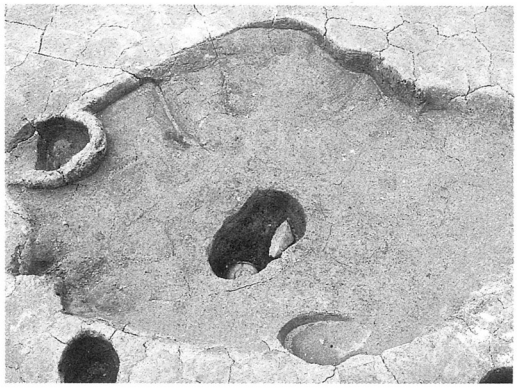


出土状況

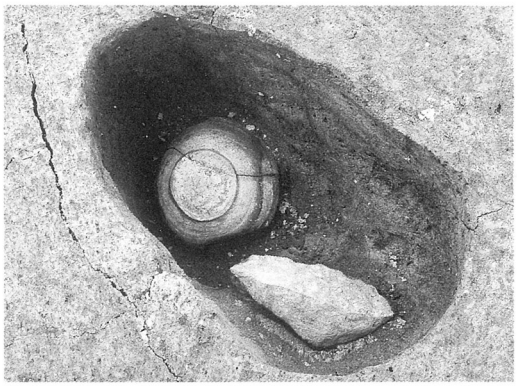
作業風景



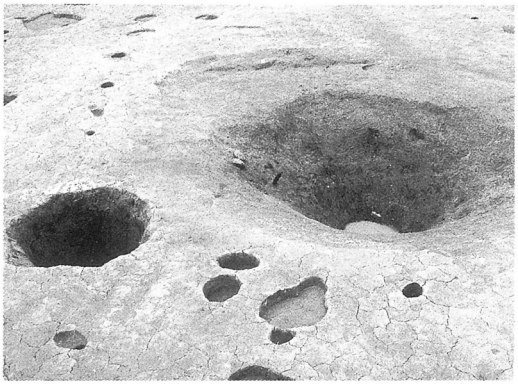
土坑１



土坑５



ピット 44 出土状況

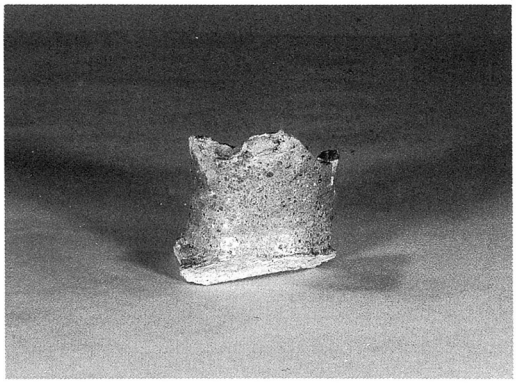


土坑６（左）土坑（右）

土坑６

図版 11　写真図版　遺構（３）

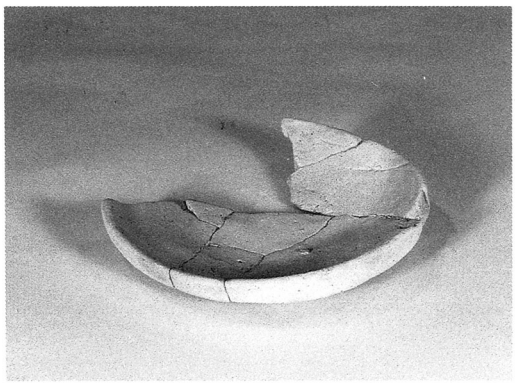
ピット８



ピット 10

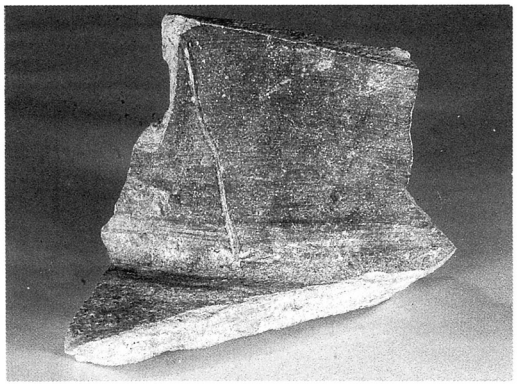
ピット 15

ピット 44

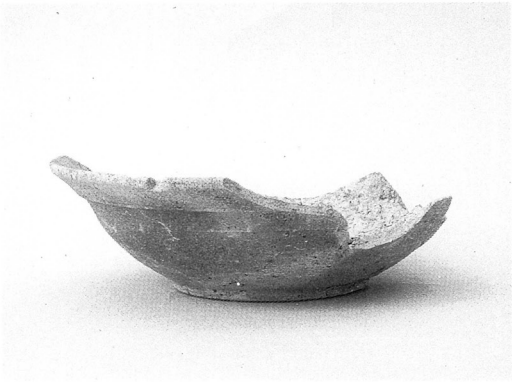


土坑１

土坑１

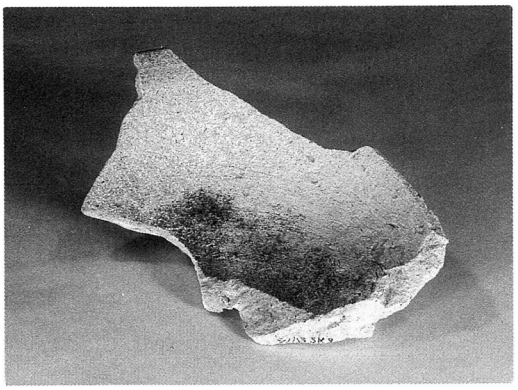


土坑１

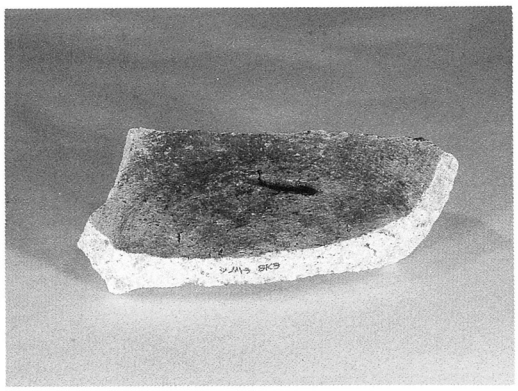


土坑１

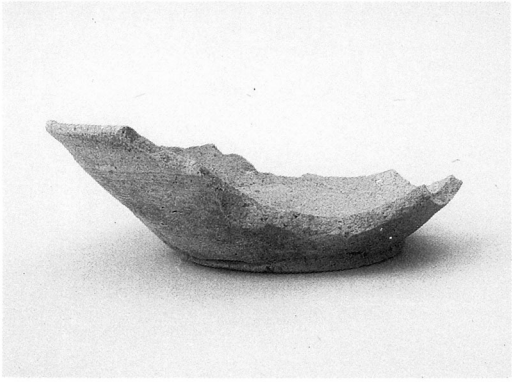
図版 12　写真図版　遺物（１）



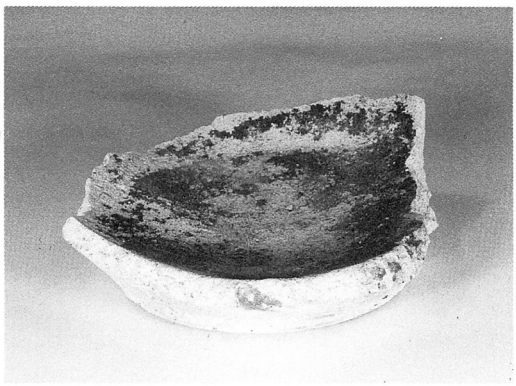
土坑１



土坑１

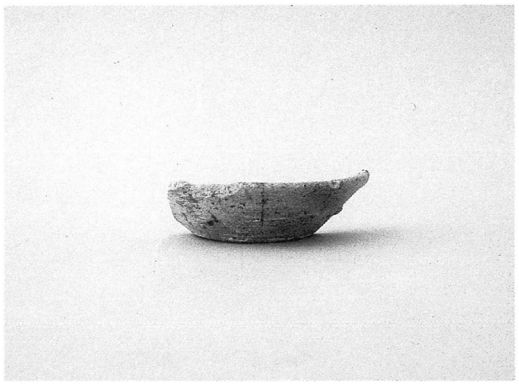


土坑１



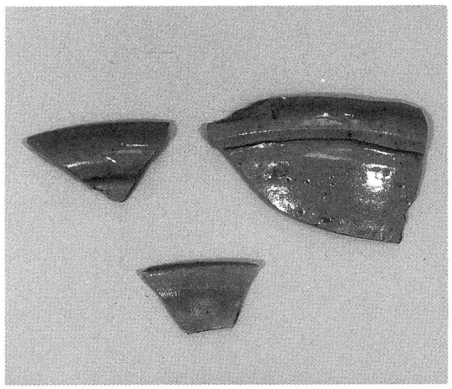
土坑１

土坑１

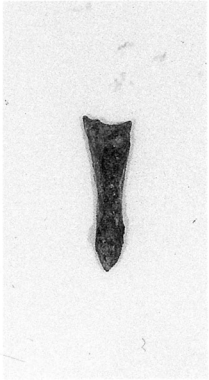


土坑１

土坑１

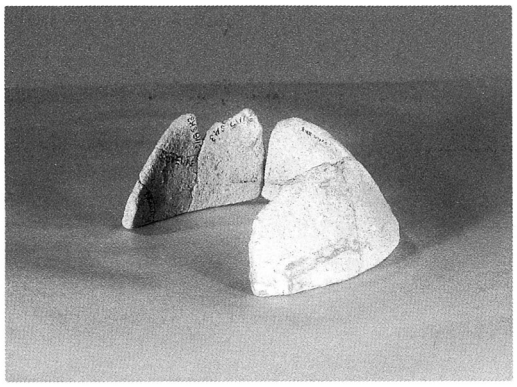


土坑１

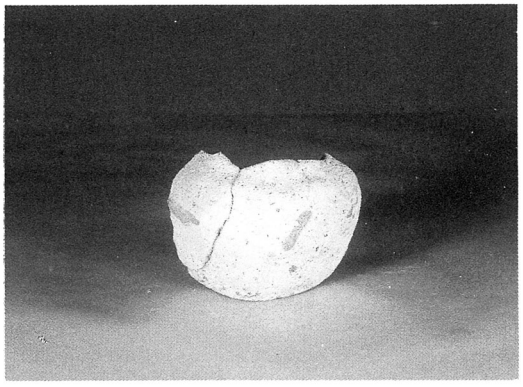


土坑１

図版 13　写真図版　遺構（２）



土坑５



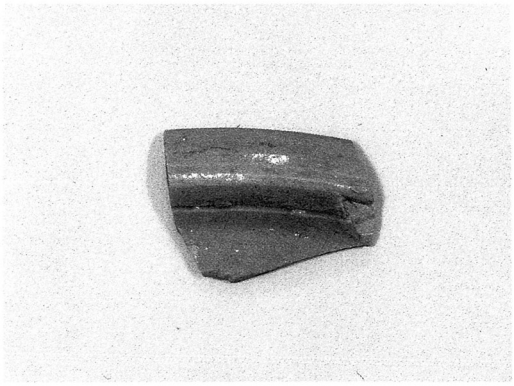
土坑５

遺物包含層

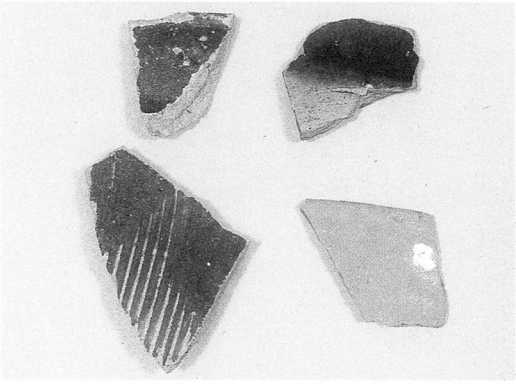
遺物包含層

遺物包含層

遺物包含層



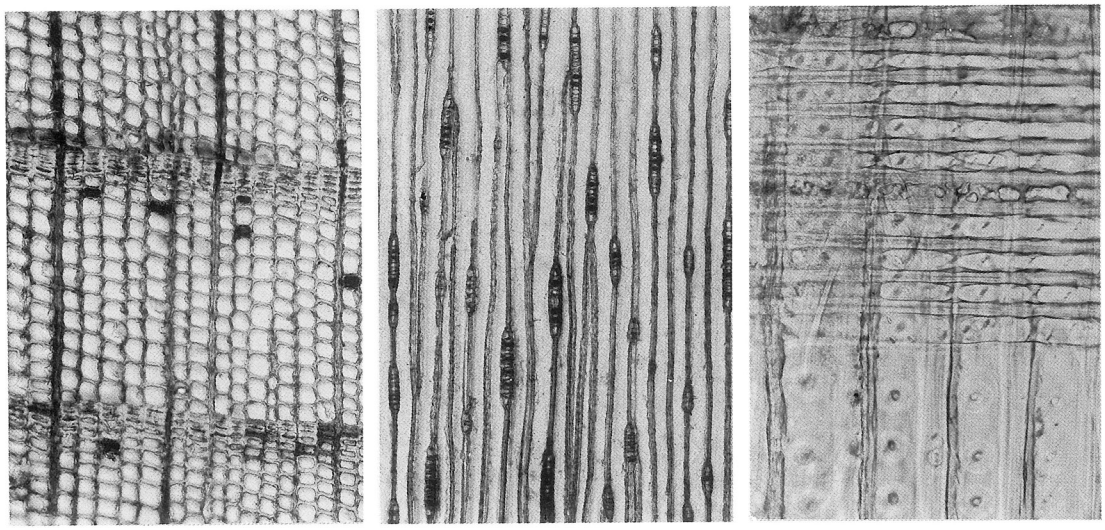
遺物包含層



遺物包含層

図版 14　写真図版　遺構（３）

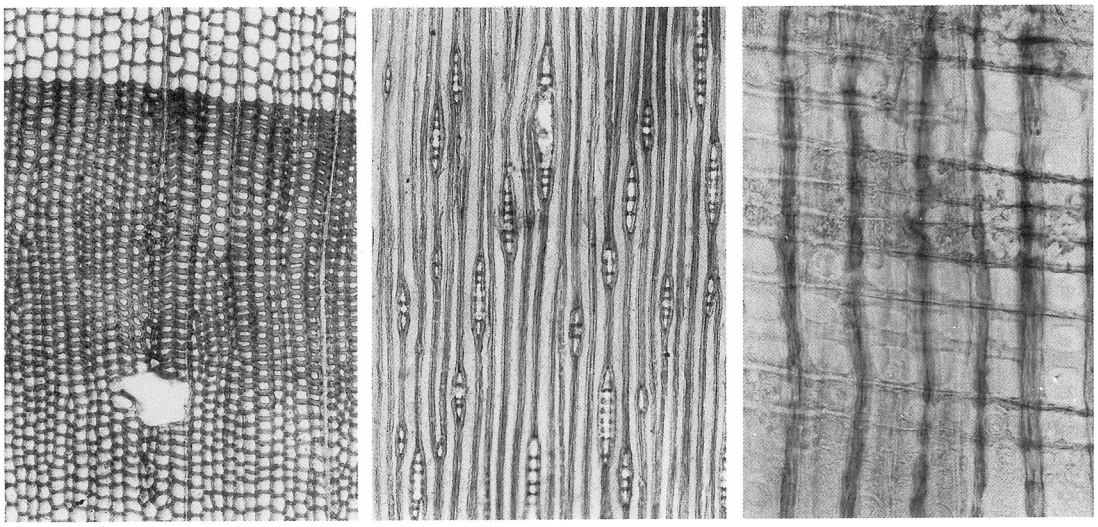
bar:



1a. ヒノキ(横断面)
W5 bar:0.2mm

1b. 同(接線断面) bar:0.2mm

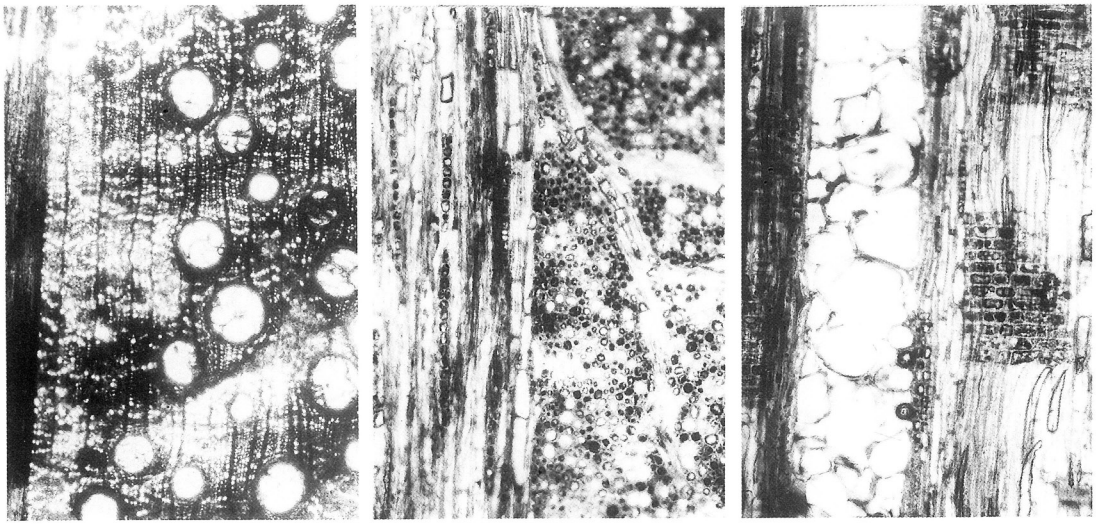
1c. 同(放射断面) bar:0.05mm



2a. マツ属複維管束亜属(横断面)
W4 bar:0.2mm

2b. 同(接線断面) bar:0.2mm

2c. 同(放射断面) bar:0.05mm



3a. アカガアシ亜属(横断面)
W8 bar:0.5mm

3b. 同(接線断面) bar:0.2mm

3c. 同(放射断面) bar:0.1mm

図版 15 写真図版 出土木材の樹種

報 告 書 抄 録

ふりがな	しのはらいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	篠原遺跡発掘調査報告書 ―篠原農住土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査―
編著者名	水谷芳春、大杉規之、植田弥生
編集機関	桑名市教育委員会
所 在 地	511 － 8601　三重県桑名市中央町二丁目 37 番地　　TEL0594-24-1361
発行年月日	西暦 2002 年 3 月 29 日

ふりがな 所有遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
しのはらいせき 篠 原 遺 跡	みえけんくわなし 三重県桑名市 おおあざくわべ 大 字 桑 部 あざしのはら 字 篠 原	242055 No. 113	35° 2′ 51″	136° 38′ 43″	1998. 4. 6～ 2002. 3. 29	400 ㎡	土地区画整理

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
篠原遺跡	散布地	古墳 中世	柱穴 土坑	土師器 須恵器 山茶碗 木材	

三重県桑名市

篠原遺跡発掘調査報告書

2002 年 3 月 29 日

編集・発行　桑名市教育委員会
印刷　　（有）日光印刷